房総の文化財

VOL. 52
ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai
平成25年3月25日　公益財団法人 千葉県教育振興財団
〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811（代）　FAX 043-424-4811
http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

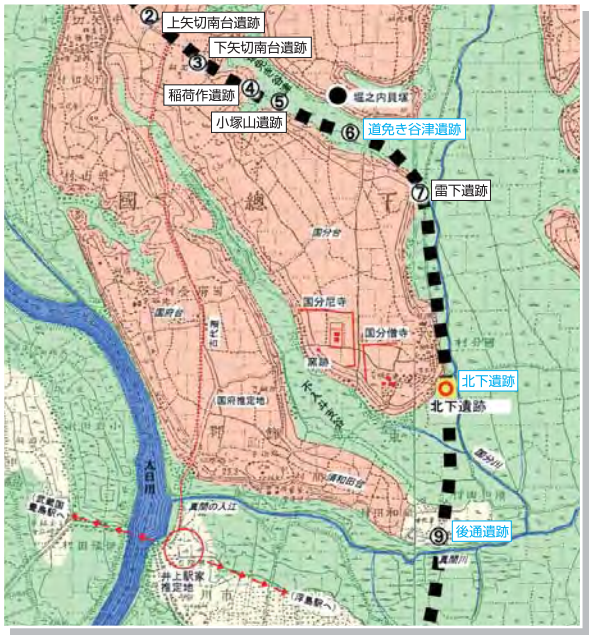
市川市 道免き谷津遺跡の発掘のようす

contents

発掘調査速報
【外環道の遺跡】
● 北下遺跡
● 後通遺跡
● 道免き谷津遺跡

外環道の遺跡

市川市



東京外かく環状道路（通称外環道）の建設に伴って調査された遺跡は、通称「国分台」と呼ばれる標高25mほどの平坦な台地の東側から北側を巡るように所在し、上矢切南台遺跡ほか2遺跡は台地上、他は低地上に立地しています。特に、低地部にある遺跡からは、台地上ではほとんど確認されない木製品がたくさん発見されており、当時の生活を考える上で貴重な情報を与えてくれます。

今回は、外環道の調査によって注目される遺構や遺物が見つかった北下遺跡・後通遺跡・道免き谷津遺跡の3遺跡を取り上げてその成果をご紹介します。

北下遺跡

北下遺跡は、平成14年度から発掘が始まり、下総国分寺の瓦を焼いた北下瓦窯や古代の川や道路の跡などが調査されています。川から発見されたマツリに関連する多くの遺物については、『房総の文化財』VOL49で紹介しました。ここでは、主に下総国分寺の創建期の瓦が作られていた瓦窯跡について紹介します。

左側の窯は、古墳時代以降用いられている登り窯で、焼成室内部が階段状となり、そこに瓦を並べて焼いています。右側は、床を平坦にした平窯で、当時の先進的な構造の窯です。しかし、火の通りを良くするための「牀」（ロストル）と呼ばれる凹凸がこの窯では確認されていないことから、牀が設けられる前の無牀の平窯ということになるでしょう。この時期の無牀の平窯は西日本に多く見られます。下総国分寺の創建にはこうした先進技術が採用されたようです。

▲登り窯

▲平窯

軒丸瓦▶

軒平瓦▲

後通遺跡・道免き谷津遺跡　BC（紀元前）

旧石器時代　縄文時代　弥生

約12,000年前　約2,300年前

後通遺跡

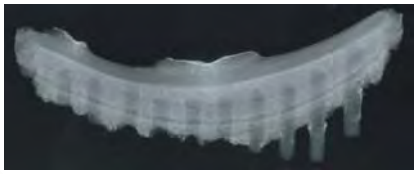
後通遺跡は、国分川と真間川にはさまれた東西500mほどの「須和田砂州」と呼ばれる砂州上にあります。現地表面から2mほど掘り下げると古墳時代から中世にかけて堆積した黒い粘土が現れ、その下、標高０mほどで砂だけの層になり、この間から砂の層にかけて縄文時代の遺物などが含まれています。砂の層の下には砂州が出来上がる以前、このあたりが海岸線に近かった頃に堆積した貝をたくさん含んだ層があります。

これまでの調査で、縄文時代から中世にかけての多くの遺構や遺物が発見されています。

▲発掘風景
調査地点が低地にあるため、水の浸入や土砂の崩れを防ぐために周囲を鉄の柵で囲んでいます。ぬかるみの中の発掘は一苦労です。

▼上から

▼櫛の全体



▲エックス線による撮影
縦に黒っぽくみえるのが櫛の歯です。

後通遺跡の標高0mの地点から、縄文時代の終わり頃（約2,800年前）の赤い漆で塗られた木製の櫛が発見されました。黒い粘土層の一番下のあたりです。現在残っている部分は、櫛の付け根の部分と歯の一部だけですが、大きさは、幅9.9cm、縦の長さ3.9cmで、現状で確認できる櫛の歯の数は12本です。

県内で櫛が見つかった例は少なく、市川市の道免き谷津遺跡、土器崎遺跡（木更津市）、高谷川遺跡（芝山町）に続き4例目の資料となりました。近くから時期がわかる土器などの出土はありませんでしたが、その特徴から、縄文時代終わり頃に作られたものと思われます。

▲井戸の掘り込みと上に置かれた土器

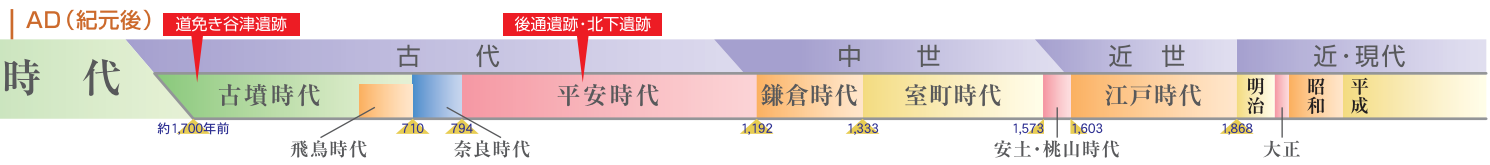
▲井戸枠の状況

▲井戸枠と内側の井筒

▲井筒

後通遺跡は、かつての下総国府推定域の東端に位置しています。この場所から、平安時代前期（約1,050年前）の井戸が発見されました。井戸からは、長短１組ずつの4枚の板を方形に組み合わせた井戸枠と、その内側から曲物を上下2つに組み合わせたヒノキ製の井筒も確認されました。井戸枠の板は、形状やホゾ穴などの特徴から、船と思われる部材を再利用した可能性があります。

井戸枠の外側は、杭状のスギ製の木材で囲まれているようで、周りの土が井戸内部に流れ込まないような工夫がされています。井戸の上には、赤く塗られた土師器の杯が置かれており、井戸を埋めたときの儀式に使われたようです。



道免き谷津遺跡

道免き谷津遺跡の調査では、縄文時代後期から晩期を中心とする遺構や遺物の包含層及び古墳時代前期の包含層などが発見されています。

発掘調査に際しては、周囲からの水の進入を防ぐために、鉄製の杭で囲むなどの対策が必要となります。

道免き谷津遺跡は谷底にあるため、水につかったままの状態で埋まっています。そのため空気から遮断され、台地上ではほとんど発見されることがない木製品が多く残っていました。

下の写真は、古墳時代前期（約1,700年前）の鍬の未製品と鋤です。当時の鍬は、1枚の板にいくつかの鍬先を連結して削り出し、それを一つずつ切り離して完成されるという作り方をしています。この例はその工程を示す良好な資料です。現在の長さは約74cm、幅約26cm、くびれた部分の幅約10cmで、このくびれ部で切り離すと2つの鍬先が出来上がります。

▲製作途中の鍬
くびれた部分で切り離した後に穴を開けて柄を取り付ければ完成です。

▲鋤の出土状況
鋤は、鍬とは異なり、1本の木材から柄と鋤先を作り出しています。

道免き谷津遺跡では、農具の他にもいくつかの木製品が見つかっています。

左の写真は、縄文時代後期（約4,000年前）の土器と一緒に出土した木の器に赤漆を塗った「木胎漆器」と呼ばれる珍しいものです。縄文時代前期以降、縄文土器に漆を塗ることはありますが、後期になると木の器に彩色する技術が発達します。日本の漆器のルーツと言えるでしょう。右下の写真は縄文時代晩期（約2,800年前）の耳飾りで、外径8cmと非常に大きなものです。耳たぶに穴を開け、次第に大きな耳飾りを装着して穴を大きくし、このように大きな耳飾りを付けていたのでしょう。大変な思いをしてまで飾っていた女性はどんな人だったのでしょうか。

▲木胎漆器

▲大型の耳飾り